

# つらい痛みをあきらめないで 人工関節置換術で何歳になっても歩ける膝に！

専門医に  
聞いて  
みました

尼崎中央病院 整形外科部長  
**細井 波留夫先生**(写真左)  
専門医：日本整形外科学会専門医



尼崎中央病院 整形外科  
**藤井 隆太郎先生**(写真右)

元大阪大学医学部附属病院 整形外科医  
専門医：日本整形外科学会専門医

最終的な治療方法となるのが人工膝関節置換術です。変形してしまった膝関節の表面を取り除いて、人工関節に取り換える手術療法です。人工関節の耐用年数は、一般的に25年といわれていますので、60代後半～70代になってから、思い切った手術をするという人が多くなります。

## 人工膝関節置換術の術前、術後のX線写真



手術後 手術前  
O脚の改善が確認できます 軟骨がすり減り、O脚になっています

## 人工膝関節置換術について教えてください

治療の基本は、まず減量です。加えて、薬物療法と筋力トレーニングを行います。消炎鎮痛剤の内服、湿布などの外用薬や、関節内への注射も一時的に症状を抑えるのに有効です。膝を支えるサポーターや足底装具などのアドバイスも行ったりもします。痛い→歩か



## 治療にはどのような方法がありますか？

治療の基本は、まず減量です。加えて、薬物療法と筋力トレーニングを行います。消炎鎮痛剤の内服、湿布などの外用薬や、関節内への注射も一時的に症状を抑えるのに有効です。膝を支えるサポーターや足底装具などのアドバイスも行ったりもします。痛い→歩か



## 膝が痛くて歩きづらいのは病気でしょうか？

膝の痛みや不具合を訴える人はたくさんいます。その原因として、関節リウマチや半月板損傷などの怪我による場合も考えられますが、高齢者に圧倒的に多いのが変形性膝関節症です。変形性膝関節症とは、どのような病気か、どのような治療法があるのでしょうか。膝専門医である尼崎中央病院整形外科の細井先生と藤井先生のお二人に聞きました。

## 膝の痛みで悩む人へメッセージ

### 医師とも一生の付き合い、納得のいくまで相談を

いつまでも自分の足で歩くことができるように、日常生活に必要な動作ができる膝を作るのが人工関節置換術の目的です。変形性膝関節症の患者さんとは一生のお付き合いになりますから、信頼関係が必要です。(細井先生)

膝が痛いから楽しみだった旅行にも行けなくなつた。動くのがおつくだと、我慢する人生を送るのなら思い切って手術しましょうと勧めています。ぜひ、納得のいくまで医師と相談してください。(藤井先生)



術後は院内でリハビリを伸ばす際には、どうを言い、普通に歩けるようにも痛みが伴います。うになれば退院となり退院後は、できるだけリハビリには痛みが外に出て歩き、膝を曲げ付き物ですが、これは固い運動も続けてください。また膝を軟らかくする。特に、自転車や歩くために必要な痛みです。膝が膝関節を軟らかく膝を自由に曲げ伸ばして動かすため、自転車や歩くようにするために、術後は、十分に時間をかけて、十分に身体を動かして、ストレッチをする必要が重を適切にコントロールする必要があります。よろしくお願いします。

## リハビリはやはり痛むのでしょうか？

近年、人工膝関節置換術において、皮膚を切開かMISは、全ての人(侵襲)する長さを従来より短く、患者さんの容態や症状に温存する「MIS」が注目されています。傷口は小さく、筋肉も切らず、筋肉を切らな小さいに越したことはないため患者さんの体にかかる負担が軽くなり、早期リハビリ開始、早期回復にもつながります。手術において、皮膚を切開かMISは、全ての人(侵襲)する長さを従来より短く、患者さんの容態や症状に温存する「MIS」が注目されています。傷口は小さく、筋肉も切らず、筋肉を切らな小さいに越したことはないため患者さんの体にかかる負担が軽くなり、早期リハビリ開始、早期回復にもつながります。手術において、皮膚を切開かMISは、全ての人(侵襲)する長さを従来より短く、患者さんの容態や症状に温存する「MIS」が注目されています。傷口は小さく、筋肉も切らず、筋肉を切らな小さいに越したことはないため患者さんの体にかかる負担が軽くなり、早期リハビリ開始、早期回復にもつながります。

## MIS(最小侵襲手術)という手術方法について教えてください

近年、人工膝関節置換術において、皮膚を切開かMISは、全ての人(侵襲)する長さを従来より短く、患者さんの容態や症状に温存する「MIS」が注目されています。傷口は小さく、筋肉も切らず、筋肉を切らな小さいに越したことはないため患者さんの体にかかる負担が軽くなり、早期リハビリ開始、早期回復にもつながります。手術において、皮膚を切開かMISは、全ての人(侵襲)する長さを従来より短く、患者さんの容態や症状に温存する「MIS」が注目されています。傷口は小さく、筋肉も切らず、筋肉を切らな小さいに越したことはないため患者さんの体にかかる負担が軽くなり、早期リハビリ開始、早期回復にもつながります。